

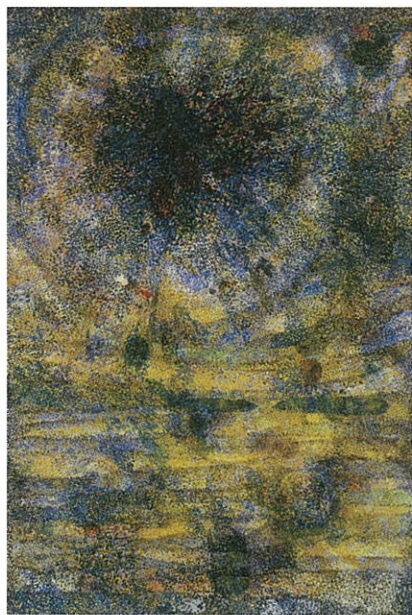
ZOCALO 2018 12 ▶ 2019 1

ZOCALO=ソカロはメキシコの都市の広場を意味するスペイン語。埼玉県立近代美術館はアートを通して交流する市民の広場をめざしています。

「特別展示：瑛九の部屋」

MOMAS コレクション第4期

1月12日(土)～4月14日(日)



瑛九《田園》1959年(特別出品:加藤南枝氏蔵)

瑛九の最重要作品、《田園》(1959年)を展示します。小さな部屋を暗室に設え、《田園》だけを展示します。暗い部屋に入ると、まるで、瞳を閉じているかのよう。《田園》を照らす光の明るさを、自由に調整できます。光の照度をあげると、《田園》は、永遠の輝きを見せる。光の照度をさげると、《田園》は、翳りゆく部屋に佇む。私の《田園》、貴方の《田園》、いま、《田園》の彼方へ。

瑛九は神に選ばれ、神に代って「田園」を描き上げた。幾百幾千年の時間の中で、この絵の謎は解きあかさされ、幾多の人々をニルバーナにみちびくであろう。

瑛九「田園」展(紀伊國屋画廊/1975年8月21日～8月26日)ポスター裏面掲載の文章

《田園》を見ていた午後

2016年12月17日、午後、東京国立近代美術館。

瑛九の最重要作品《田園》の前に立つ加藤南枝さん。ただならぬ気配、加藤さんが《田園》を見ているのか、《田園》が加藤さんを見ているのか、絵と人が全身全霊で対峙している、「この方は、どこまで深く《田園》を感じているのだろう」。

その加藤さんから、「生誕100年記念 瑛九展」(2011年)を契機として、ある提案をいただいていた。暗室に《田園》を展示し、見る人が照明をコントロールしながら鑑賞するというプランです。これは、加藤さんが1975年から1980年にかけて、日本とアメリカで企画した「ライト・デッサン」のコンセプトを引きつづ提案です。美術館としては様々なハードルがあるのですが、慎重に検討し、この提案を実現したいというお返事をさしあげ、相談を進めていました。加藤さんは「8年間、毎日、《田園》を見て、もともと好きだったこの絵の深さが、ようやくわかった。私が長い時間をかけて発見した《田園》の魅力、短い時間での劇的な経験として体験できるようにと考え出したのが、ライト・デッサンだった。絵は説明的に見るもの

ではなく、感じるものである。見るという意識を忘れて、絵を感じてもらいたいです。」と力説してくださいました。

2017年1月7日、午後、東京国立近代美術館。

加藤さんのように《田園》を8年間見続けることは叶わないけれど、「見るという意識が消えるまで見てみよう」、バーネット・ニューマンの連作《十字架の道行》を見るのに90分かかった経験を思い出して、《田園》の前に立つ加藤さんの姿を想起しながら、《田園》の前に立ってみました。しばらく見ていると筆触が流動的になり、画面がうねり、凹凸があるように見え始めます。細かな色の点、キャンバスに突き刺さった、砕け散ったガラスの破片のように感じます。絵を見ているという感覚が薄れ、流れに身を任せると、心地よい気持ちと、激しい渦に飲み込まれるような畏怖の念が押し寄せ、音楽が流れ始めます。そのあと、今度は、映画を感じました。《田園》は絵画なので、映画の方が近いはずですが、音楽を先に感じたのは、時間の流れを感じたからだと思います。音楽的時間が、目の前の絵画を「映画のように見る」という感覚を生むのでしょうか。

集中を途切らせないように見続けていたのに、音楽や映画の終わりが感覚的に了解されるように、「ああ、終わりがきている。」という実感がやってきて、自分の感覚が《田園》から出て行くのがわかりました。我に帰ったように現実感が押し寄せてくると、宇宙旅行から戻った宇宙飛行士のような気分でした(宇宙に行ったことはないですが)。大げさではなく、現実の時間と空間とは異なる時空を旅したような感覚でした。時計を見ると、現実の時間で、おおよそ60分が経過していました。

2018年10月16日、埼玉県立近代美術館。

「特別展示：瑛九の部屋」の打合せ後、加藤さんは、台車にのせられた《田園》を、丁寧に、時間をかけて、ご覧になっていました。そして、《田園》と一緒に見ながら、加藤さんに、「田園を60分かけて見ました。」とお伝えしました。加藤さんの8年間には到底およびませんが、通常の展示でも、集中して60分見ると、筆触や色彩の変化を感じ、音楽や映画のように絵を体験できました。私は「ライト・デッサン」を体験していませんが、《田園》を60分見た経験から、加藤さんの提案に取り組む根拠が得られたように感じます。次は、皆さんの番です。闇と光の中で、ぜひ、「貴方の《田園》」と出会ってください。

美術館は、「作品を見せる場所」として、調査や研究のみではなく、「見せ方」の研究も重要な責務としています。今回の「瑛九の部屋」は、加藤さんご提案を契機としていますが、美術館は、美術館の領分において、「鑑賞の方法」を開拓する試みとして、この企画に取り組む動機があります。

多くの方に、《田園》の魅力を感じていただき、瑛九の才能を感じていただき、作品鑑賞の可能性を感じていただきたいと思います。切に願っています。(G.U.)

瑛九と光春ーイメージの版／層

「瑛九」、読みは「エイキュウ」、サインは「Q Ei」。本名「杉田秀夫」、1936年から「瑛九」と名乗る。以下は、「生誕100年記念 瑛九展」(2011年)のカタログより。

1911年4月28日、杉田秀夫、宮崎市に生まれる。

文学・文筆家／論客・美術評論／写真家・フォト・デッサン／東洋回帰・静坐／俳句・水墨画・詩人／共産党・文化運動家・地方文化への情熱／エスペラント・国際的視野／自由な組織・デモクラート／啓蒙化・指導者・教師／版画家・画家

1960年3月11日、瑛九、浦和で没する。

このように多様な活動を展開した瑛九の名前が美術史に刻まれているのは、「山田光春」(以下「光春」と表記)の功績です。光春は、教師として赴任した宮崎で、瑛九と名乗る前の杉田秀夫と運命的な出会いを果たします。二人は意気投合し、鹿児島島の指宿で「デッサン合宿」とも呼べるような日々を過ごすなど、親密に交流します。光春はほどなく次の赴任先に移り住むため、二人が宮崎で共に過ごした期間は短いのですが、親交は瑛九が没するまで続きます。さらに、驚くべきことは、瑛九が没した後に開始された、光春の執念ともいえるべき、瑛九の足跡を辿る日々です。

光春は日本全国を巡り、瑛九の油彩画の所蔵者を訪ねました。作品を撮影し、関係者への聞き取りを続け、杉田秀夫の人生と瑛九の創作を克明に調べ上げ、その成果を、『瑛九 評伝と作品』(青龍洞/1976)にまとめます。恐るべき労作であり、なぜここまでできるのかと、感嘆せざるを得ません。私見では、「杉田秀夫という人間」に宿った「瑛九という装置」の誕生に、光春が深く関わっていたからではないかと推測しています。つまり、光春にとって、「瑛九」の活動は他人事ではなく、自分のことのように感じていたのだと思うのです。「瑛九と光春ーイメージの版／層」のコーナーでは、2016年度に、光春のご遺族



1 山田光春《Work》(ガラス)1936-37年



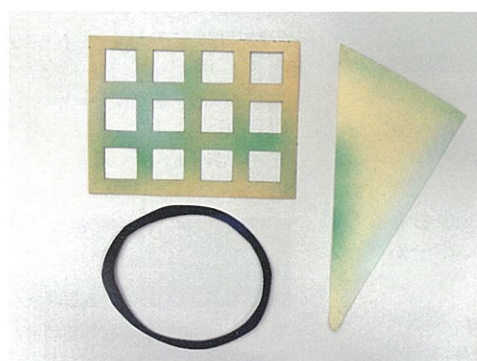
2 山田光春《スケッチブック》より(モデルは瑛九と推測される)

からご寄贈いただいた光春のガラス絵[1]とスケッチブックを初公開します。寄贈いただいた、指宿での「デッサン合宿」の時に描かれたスケッチブックの中には、瑛九と推測される人物を描いた貴重な作例も含まれています[2]。

タイトルにある「版／層」が示すように、光春のガラス絵も、瑛九のフォト・デッサンも、「版」や「層(レイヤー)」に関わる表現といえます。「光春の作品」と「瑛九の作品」、さらに、「光春による

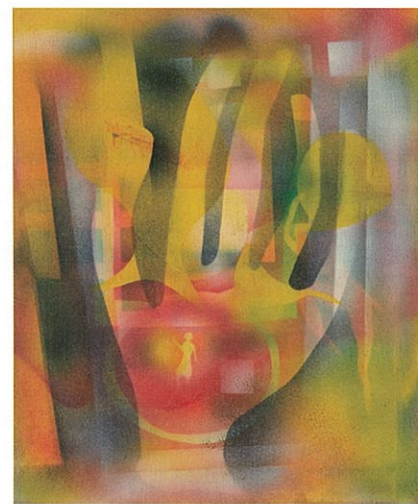
瑛九関連資料」、そして、「瑛九が制作に用いた型紙等」を一堂に会して、独創的なイメージがどのように生み出されるのか、その「イメージの搬送」の過程を探ってみたいと思います。

瑛九については、2017年度に購入した瑛九の油彩画《手》[3]を、この作品の制作に用いられたと推測される「型紙」[4]とあわせて紹介します。



4《手》の制作に用いたと思われる型紙(上)

3 瑛九《手》1957年(右)



さらに、2017年度にご寄贈いただいた、フォト・デッサン《面影》[5]と、コラージュ作品《声》[6]の2点を、初公開します。《面影》では、カメラで撮影したガラスの原板に直接加工が施され、さらに、これを焼付した印画紙の上からの描画もなされています。このタイプのフォト・デッサンは作例が少なく、これまで当館でも一点も収蔵できておりませんでしたので、極めて貴重な作品となります。また、《声》は、構成主義的な画面構成が感じられるコラージュ作品であり、こちらも、当館収蔵のコラージュ作品とは傾向が異なる重要な作品です。

このコーナーと、「特別展示：瑛九の部屋」をあわせてご覧いただくことで、瑛九の芸術について、さらに深く体験していただくことができるでしょう。お楽しみください。(G.U.)



5 瑛九《面影》1936年



6 瑛九《声》1937年頃